

滋賀県の琵琶湖から愛知川を遡って山間部に進むと、鈴鹿山脈に位置する奥永源寺地域に入り、木地師文化発祥の地である小椋谷に行き着きます。小椋谷は、東近江市君ヶ畑町、蛭谷町、箕川町、政所町、黄和町、九居瀬町を含む範囲にあり、平安時代からの木地師文化発祥を裏付ける歴史的資料が多く存在します。また、木地師の歴史、文化、信仰を表わす建造物や木地師が使用した道具類、轆轤技術も継承されてきました。

木地師は、轆轤でトチノキ、ブナ、ケヤキなどから主に椀や盆などの木地をつくる職人で、木地屋とも呼ばれました。小椋谷出身の木地師は、良材を求めて日本各地の山に入って轆轤を引き、次の山へと移住する暮らしを送りながら、日本の木の文化・森の文化の礎を築いてきました。

木地の材料となる樹木を採取する過程、もしくはそれに従事する人は「サキヤマ」と呼ばれ、特に「コビキ仲間のリーダー格、山の木を根から伐採する巧者とされました。伐採方法は、山の地形に応じて「ノボシ」「ヨコヤマ」「クダシ」と呼ばれる3種類の方法があり、独特の技術が伝承されてきました。また、轆轤を用いた木椀等の作成に至るまでの採材、木取り、乾燥、粗削り等の各工程で用いる道具は多種多様でした。

江戸時代からは、君ヶ畑町の「高松



大皇器地祖神社



蛭谷町の集落

日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう！

第19回 木地師文化発祥の地 東近江市小椋谷

一般社団法人 日本森林学会 林業遺産選定委員 京都大学 深町加津枝



木地師資料館の展示



君ヶ畑町の集落



木地師の木札 (東近江市提供)



木地師を描いた金龍寺所蔵の絵図 (東近江市提供)



小椋谷の森

御所(金龍寺)や蛭谷町の「筒井公文所(帰雲庵)」において、「氏子狩帳」や「氏子駆帳」という木地師の戸籍簿が作成され、全国の木地師村落を数年ごとに廻国し、木地師を統括するようになりました。また、木地師が知らぬ土地で支障なく仕事ができるように、往来手形や、免状、鑑札、神札等を発行し、木地師の活動を支援しました。

全国に広がった木地師は、惟喬親王を木地師の祖神としており、関連する建造物として、君ヶ畑町の大皇器地祖神社、蛭谷町の筒井八幡宮(現在の筒井神社)があります。大皇器地祖神社の神主と金龍寺の住職は「高松御所」を主宰し、筒井八幡宮の神主と帰雲庵の住職は「筒井公文所」を主宰しており、すべての木地師を自らの氏子として保護したため、全国最大の木地師集団の支配組織が確立したのです。

君ヶ畑町の高松御所は859年の創建といわれ、1694年から1873年までの「氏子狩帳」53冊や、能面や木地を生業とする人々の暮らしの中にあつた決まり事、生活習俗の変遷や背景に関する古文書等木地師に関連する資料を所蔵しています。蛭谷町の筒井公文所は平安時代初期の865年創建と伝わり、隣接する木地師資料館には、木地師統括の記録や轆轤の道具類、往来手形、木札、1647年から1893年までの「氏子駆帳」34冊や、木地師の身元を証明した「木地師往来手形」をはじめ、多くの古文書等の貴重な資料が展示されています。越前、会津、山中、三河、信州、山陰など、全国各地の木地師からの寄贈作品もあります。

また、小椋谷にある多くの神社・仏閣では、室町時代から江戸時代にかけての能面や能装束、古文書等が重要文化財や県・市指定有形文化財に指定されています。

小椋谷には、木地師に関する信仰、祭行事などが継承され、全国から多くの木地師の子孫や関係者が集まってきました。そして、地元と行政などが協力して行う「匠の祭」、「木地師文化フォーラム」、「春の奥永源寺山歩道」では、作品展示・販売、季節ごとの森のハイキングなどが企画され、また、氏子狩帳の虫干しに合わせたツアーや見学会を開催するなど木地師文化の継承、普及・啓発がなされています。

君ヶ畑町の木地師の小椋昭二さん(ろくろ工房 君志彦)は、「ケヤキやトチ、スギなど地元の森からの材も含め様々な木を使います。特徴を見極め、十分に乾燥させ、それだけの木を最大限に活かした制作をしています。」と語っており、小椋さんの木に対する深い思い、丁寧な工程は工房の様子や1つの作品からも伝わってきます。また、蛭谷町の木地師、北野清治さん(筒井ろくろ)は、「林業遺産に認定され、木地師文化発祥の地での仕事の重みをつくづく感じます。最近では塗師からの注文もあり、地域の未来につながる取り組みを地道に続けていきたい。」と話します。

木地師という職人の技そして多様な主体が関わる取り組みが地域をこえて広がっており、これからの日本の木の文化・森の文化の発展に大きな役割を果たしていくことが期待されます。



「匠の祭」の様子 (東近江市提供)



木地師の工房にある木の乾燥場